

KYOFU-RYU



佐賀のまぼろしの流派

生花 去風流

去風流19世家元
松旭堂露山資料
寄贈記念

最後の家元・松旭堂露山

ごあいさつ

生花の一流派である去風流は、江戸時代中期に京都で始まり、明和五年（二七六八）に佐賀へもたらされました。佐賀では八代藩主鍋島治茂公のお好みとなり佐賀城でも上覧が行われ、近代には池坊と並ぶ二大流派として藩祖直茂公・初代藩主勝茂公らを祀る松原神社の例祭での献花も行われました。家元は世襲制ではなく優秀な門弟が継いでいく慣わしでしたが、第二次世界大戦の時世下において十九世家元を最後に途絶え、今や去風流は忘れ去られた流派となりました。

このたびご縁を得て、佐賀市柳町で活躍した最後の家元十九世・松旭堂露山（松本浅一／一八七一～一九四〇）のご子孫より、露山所持品を中心とした去風流関係資料を当財団に一括寄贈いただきました。露山は昭和六年以降、開館間もない徴古館を会場として去風流趣味会を開催し、道具類を佐賀内庫所が提供するなど、鍋島家や徴古館とも深い関わりを持っています。本展では初公開となるこれら寄贈資料を中心に展観し、去風流の歴史や特徴、松旭堂露山の生涯についてご紹介いたします。

平成二十五年五月二十日

公益財団法人 鍋島報效会



目次

ごあいさつ	1
目次・凡例	2
図版・解説	3
コラム ◆ 生花 去風流	3
マップ ◆ 城下絵図で見る皆伝者のすまい	6
コラム ◆ 京都の去風流	15
コラム ◆ 最後の家元 松旭堂露山	20
コラム ◆ 家元の本職 蒔絵師・芦刈梅吉	46
コラム ◆ 池坊指導者 春陽館籬蝶（古賀長太夫）	47
出品リスト	50

凡例

- 一、この図録は、公益財団法人鍋島報効会が主催し、平成二十五年五月二十日（月）から七月二十日（土）まで徴古館において開催する「生花 去風流 ― 最後の家元・松旭堂露山」展の解説付き総目録である。
- 一、資料の順序は各テーマに従って配列し、陳列の順序とは必ずしも一致しない。
- 一、資料解説の表記は、出品番号、名称、員数、時代・年代、作者、法量、品質・形状、所用者、所蔵者、解説の順に記した。
- 一、所蔵者表記のないものは、いずれも公益財団法人鍋島報効会所蔵。但し、佐賀県立図書館に寄託されている鍋島家文庫資料については、その旨と請求番号を付した。
- 一、解説文中の史料引用は、カタカナや漢字を平仮名にするなど適宜表記を改め、読み下し文にして送り仮名を補ったところがある。
- 一、編集は公益財団法人鍋島報効会（学芸員 藤口悦子・野口朋子・富田紘次・中神明夏）が行った。解説・執筆は野口朋子が行い、一部を富田紘次が分担した。
- 一、図版の写真撮影は富田紘次が行い、野口朋子、伊藤 優（元財団法人鍋島報効会 資料調査員）が補佐した。但し、佐賀県立美術館所蔵資料は、同館より写真の提供を受け、一部を富田が撮影した。

生花 去風流

KYOFU-RYU

「去風流」は今や耳なじみのない言葉であるが、生花の一流派であり、草花の自然のままの姿を活かす抛入花である。言うまでもなく生花は日本が誇る伝統文化であり、野の草花を手折り、器に挿して愛で、あるいは神仏に供するという行為が室町時代に芸能として整備され、近世以降多様な展開を見せた。数ある流派の中でも最古の伝統と最多の華道人口を有するのは池坊で、京都紫雲山頂法寺六角堂(池坊)の僧侶に始まり、十六世紀に立花の確立をみた。池坊は佐賀においても主流派であり数多くの文化人が嗜んでいたが、明治から昭和初期にかけて、この池坊と並ぶ一大流派として、佐賀藩祖鍋島直茂、初代藩主鍋島勝茂らを祀る松原神社の春秋の祭礼で献花を行ったのが去風流であった。



松原神社での献花 昭和11年(1936)年10月の松原神社例祭での、去風流献花のようす。19世家元・松旭堂露山の二男である功が撮影した写真アルバムには、この時のもののほか、昭和12年例祭の写真も収録されている。

去風流は佐賀城下を舞台として継承された流派で、京都にその起源をもつ。創始者は西川去風なる人物で、米穀商であり、尺八の名手でもあったという。去風以降、家元は西川家の世襲制をとり、現在でも京都で続いている。また一方の流れとして、駿河出身の蘭皋舎子来なる人物が延享元年(二七四四)に去風より皆伝を受けた。この子来の門弟となったのが佐賀嘉瀬町妙福寺の住職福山智英(のち与賀上郷上飯盛村(現佐賀市本庄町)常照院第十七世日軌上人)であり、明和五年(一七六八)に皆伝を受け、花兮庵寒岸と名乗り、佐賀へ去風流をもたらした。



鍋島治茂(1745-1805) 8代佐賀藩主

時の佐賀藩主は八代鍋島治茂である。当該期の佐賀城下には去風流のほか数内家流、池坊流、一統流、石州流、宏道流、千家古流、古新流と八種の生花流派があったことが知られるが、それらの中でも去風流は藩

主治茂の好むところとなり、佐賀城の向陽軒や三の丸において上覧が行われた(出品資料No.1「雨中伽」)。はじめは白山町あたりの人々が学んだというが、寒岸の門弟は数多く、「系図」によると皆伝を受けたものだけでも二十名にのぼる。その中には白石鍋島家六代直章(親類)や武雄鍋島家九代茂順(親類同格)や太田鍋島家十一代茂卿(家老)といった上級家臣をはじめ、武士、医師、僧侶、町人などがあり、佐賀城下を中心としたさまざまな階層の人々に受容され流行したことがわかる。



佐賀城周辺 8代藩主鍋島治茂の代に去風流の献花が行われたという三の丸や向陽軒が見える。享保11年の火災以後、本丸は復興されず、この時代の政庁は二の丸にあった。なお向陽軒の北隣「鍋島山城」は、3世・花兮庵寒岸から皆伝を受けた直章(華名「以文館之明」)が出た白石鍋島家の屋敷。

絵図:元文佐賀城廻之絵図(1740年)

佐賀の去風流は京都の世襲制とは異なり優秀な門弟が跡を継ぐ慣わしであった。佐賀へ伝えた花兮庵寒岸を初代とはせず、京都の西川去風(去風黙翁)を裏祖(初代)と位置づけ、二世・蘭皋舎子来、三世・花兮庵寒岸、四世・清石庵嗽流、五世・白露庵一瓢、六世・吐月庵波静、七世・一陽舎豊翠、八世・仙風亭蘭史、九世・魁春舎榮芝、十世・富春亭李蹊、十一世・幽溪舎蘭雪、十二世・千秋亭一夢、十三世・風敬舎魯友、十四世・松石亭芦舟、十五世・貫玉亭露竹、十六世・春草園池水、十七世・月下園露石、十八世・松下園一秀、十九世・松旭堂露山と続いた(五ページ掲載「皆伝者系図」参照)。京都去風流の再興の祖として名高い西川「草亭」(一七八八〜一九三八)は七世家元であるが、その一方で彼と同世代の佐賀家元である露山(一八七一〜一九四〇)は十九世であり、佐賀去風流において一人一人が家元を担う

期間は三年から一〇数年と、かなり短かった。

去風流免状の階級には初目録・中目録・缺免状・皆伝の四段階があった。皆伝者は家元に届け出の上、銘々に弟子を取ることが許されていた。近代の資料を見ると、皆伝者の中にはさらに、宗匠(家元)に続き、大日本総会頭、大日本会頭、大日本総華監、大日本華監、大日本幹事、肥前国華監、佐賀幹事、郡目代等の階級が設けられている(出品資料No.13「活花入門相伝人名簿」)。



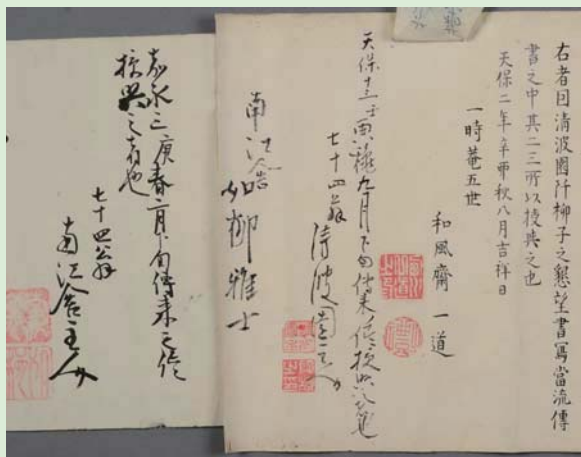
活花入門相伝人名簿 (出品資料No.13)

初代・去風黙翁より受け継がれた教義を整理し編集したのは佐賀六世の吐月庵波静である。二世以来、伝書や口伝の内容に加除増減の必要が生じたものの叶わぬままであったのが、六世にいたり増補改訂を行い、文化十五年(一八一八)に六冊本に編集した。それが「目録次第并系図」「初目録」

手続并花形」「中目録手続并花形」「皆伝手続并花形水揚」「花器寸法伝」「聞書附録并花形」であり、これ以降の家元はこれらを書き継いで学んでいる(出品資料No.26「初目録・中目録・花器傳・皆傳・系図・聞書附録」)。

京都におけるいわば本家筋の去風流と佐賀城下で継承された去風流の共通項や差異、各々の教義の特徴については不分明であるが、両者に全く接点がなかった訳ではないことが、一巻の伝書より知られる(出品資料No.11「一時庵五世・和風齋一道伝書」)。これは佐賀去風流三世・花兮庵寒岸の皆伝を承けた清波園阡柳(北島久兵衛)なる人物が、天保二年(一八三一)に京都去風流の一時庵五世・和風齋一道にその教えを請い、「当流伝書之中其三所」を伝授されたものである。この後、同十三年

一時庵五世・和風齋一道伝書 (出品資料No.11)
天保2年(1831)、京都去風流の一時庵五世・和風齋一道から、佐賀去風流の清波園阡柳に伝授された相伝書。清波園阡柳は、皆伝者の系図によれば、佐賀の3世家元・花兮庵寒岸から皆伝を受けた人物である。花兮庵寒岸から皆伝を受けた人物のうち、清波園は5番目だが、先の4人がいずれも4世~7世家元を継いでいるのに対し、清波園だけは家元になっていない。



に南江舎如柳(富吉文之允)へと受け継がれ、以後、明治八年まで五代にわたり「伝来の儘」に伝えられた。清波園阡柳はこの時、師匠である三世・寒岸よりの伝書も、同様に南江舎如柳へ伝えていた。特筆すべきは、この五代にわたって受け継いだ人々の中に、佐賀去風流の家元および皆伝者が一人もいないことである。南江舎如柳は佐賀去風流七世・一陽舎豊翠の皆伝を承けているものの、自らは「去風流五世皇都和風齋門人」と名乗っている。佐賀の本流とは別の流れがあったということなのであるうか。

去風流をめぐる人物模様についても未だ明らかではなく今後の課題であるが、三世・九世の肖像画賛(出品資料No.4・6)からは当時の文化人の交流が垣間見える。三世の肖像画に俳句を寄せたのは高木町

去風流 皆伝者系図

本書図は「去風流目録次第并系図」(公益財団法人佐賀県立博物館蔵)に準拠し、佐賀去風流の皆伝者系図である。

元祖 京都之人
去風黙翁

二世 蘭草舎子来

四世 賦流皆伝人々

方圓居可水
蓮苞舎蒸如
青浦園紫卯

涼月亭芦笛
春霞園左流
清幽亭雅碩
此君亭保竹

世・一夢皆伝人々

十六世 春草園池水
十九世 松旭堂露山
十七世 月下園露石

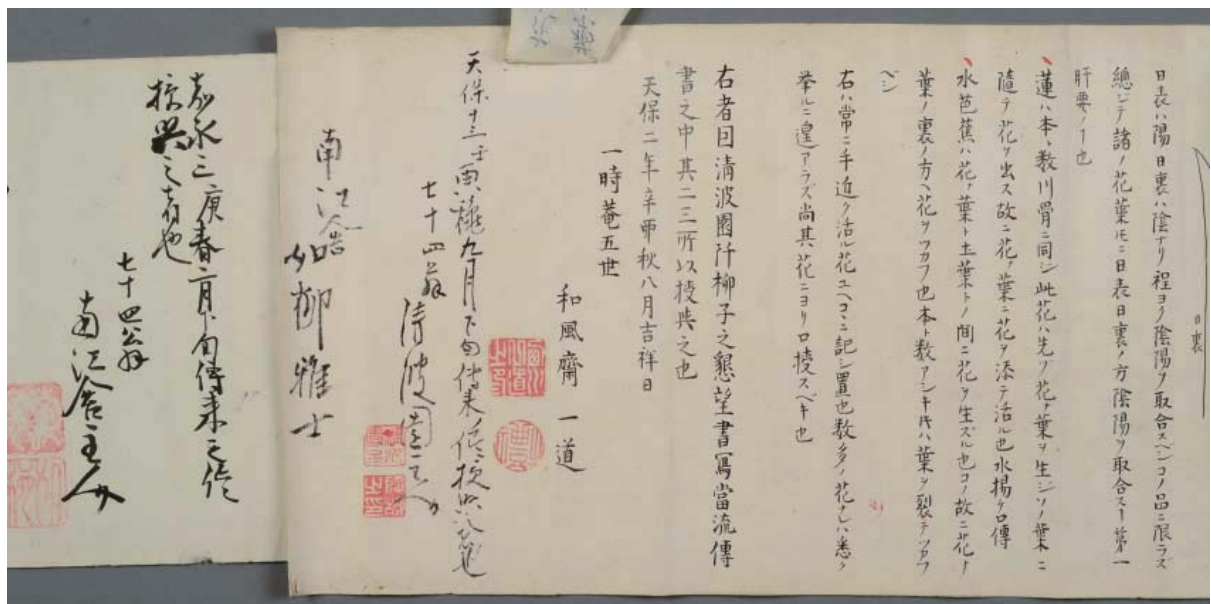
4 三世・花兮庵寒岸像 一幅

江戸時代後期（十九世紀） 十方庵 詠句
 竪八四・二cm 横三五・〇cm
 絹本着色 掛幅装



花鉢を手にして座す僧形の三世・花兮庵寒岸。画面上部には、佐賀城下・高木町裏小路の観照院（現・佐賀市高木町）住職で俳諧をよくした十方庵画山による詠句——徳の香も 普し華の根から——

三世・花兮庵寒岸（福山智英）は、佐賀嘉瀬町妙福寺の住職で、のち与賀上郷上飯盛村（現・佐賀市本庄町）常照院の第十七世日軌上人となる。京都において二世・蘭皐舎子来の門弟となり、明和五年（一七六八）に皆伝を承け、家元三世を受け継いで帰佐し、去風流の生花を佐賀に広めた。各所で出会を行い、大いに流布につとめ、上級武士を中心に数多くの門弟を育てた。皆伝を授与したものだけでも二十名にのぼる。四十二年もの長きにわたり家元として携わり、文化六年（二八〇九）に没。まさに去風流という「徳の香」を佐賀城下にあまねく広めた、佐賀去風流の「根」〔根元を締め整える花材〕たる存在といえよう。



11 一時庵五世・ 和風齋一道伝書 一卷

天保二年（一八三二）
 竪二〇・三 cm
 紙本墨書 巻子装

佐賀去風流の流れとは別に、初代去風黙翁（西川清治）は養子をとおり、一時庵去風として跡を継がせた。その後西川家の世襲となり、京都去風流として現代に至っている。

本資料は天保二年（一八三二）、清波園阡柳（北島阡柳、三世花兮庵寒岸の皆伝を承ける）の求めにより、京都去風流の一時庵五世・和風齋一道より「当流伝書之中其二三所」を授与したもの。巻末に別紙を継ぎ、天保十三年（一八四二）清波園阡柳より南江舎如柳（七世・一陽舎豊翠の皆伝を承ける）へ、嘉永三年（一八五〇）南江舎如柳より閣柳亭獨毒庵・廣遊舎二柳へ、慶応三年（一八六七）閣柳亭獨毒庵より香風軒友枝へ、明治八年（一八七五）香風軒友枝より稀清堂文枝へと「伝来のままに」受け継がれた。清波園阡柳以降の流れは出品資料 No.10「三世・花兮庵寒岸活花伝記」に同じく、京都と佐賀、両去風の伝書がセットで受け継がれている。佐賀去風流と京都去風流の接点を示す資料として貴重である。

京都の去風流

去風流の創始者・去風黙翁は、元禄十四年（一七〇一）京都に生まれた。名を西川清治という。西川家は承応年間（一六五二～五五）に丹波より京都へ出て信濃屋という米穀商を営んだ。清治は風流を愛する心深く、家業を去つて尺八の師匠となり、去風と号したという。生花を始めた経緯は不詳であるが、流派の命名については次のような逸話がある。あるとき京都の花山院家にて各流派が生花を披露した際、嵐が吹いて花々が倒れたが、一つ嵐に耐え形を保つ生花があり、宮様が誰の花か尋ねたところ、未だ名のない流派が生花が者の名は去風という、と答えたところ、去風流と名乗るよう達しがあったという（出品資料 No.7「初代・去風黙翁相伝書」）。

二世・蘭皇舎子来、三世・花兮庵寒岸と続く佐賀の流れとは別に、去風は養子をとおり、二世・一時庵去風とした。明和元年（一七六四）に初代が没した後は、西川家の世襲となった。二世・一時庵去風、三世・一峰、四世・一風、五世・一道、六世・一葉と続く。三世以降は去風を襲名しなかったが代々「一」の字を名に持ち、一時庵去風流の流れとして受け継がれた。維新後衰退した去風流を再興したのが、続く七世・一草亭である。一草亭（一八七八～一九三八）は大正二年（一九一三）に家元を継いだ。美術・伝統芸能に造詣が深く、夏目漱石・富岡鉄斎ら文人・学者とひろい交友関係をもち、また九条武子らの名門子女を門下とした。『日本の生花』『茶心花語』等を著し、日本伝統芸術の研究誌「瓶史」を創刊、主宰するなど、幅広く活躍し、一躍去風流の名を高く知らしめた。

佐賀の去風流との関係は明らかではないものの、天保二年（一八三二）、五世・一道の時に佐賀の清波園阡柳（北島久兵衛）なる人物が教えを請うている（出品資料 No.11）。また、西川一草亭と同時代を生きた佐賀の十九世・松旭堂露山は、京都を訪ね一草亭に会う機会を持ったという。京都より派生し佐賀城下で継承された名を同じくする流派との邂逅。そこではいかなる話が行われたのであろうか。

【参考文献】熊倉功夫「西川一草亭論」『花道去風流七世 西川一草亭 風流一生』淡交社、平成五年

最後の家元 松旭堂露山しょうきよくどうろざん



18 松旭堂露山肖像写真（螺鈿額入） 一面

昭和時代(20世紀) 縦 46.5cm 横 39.0cm 厚 1.5cm
額装 写真 (額)木製螺鈿 個人蔵

佐賀の去風流、最後の家元である十九世・松旭堂露山(松本浅一／一八七一～一九四〇)の生涯について記されたものは皆無に等しいが、露山の孫で生前の露山を知る唯一の人物である松本操さんとその妹・伶子さんにより、祖父露山の生涯や人となりを拝聴することができた。ここにその概要をまとめた。

生い立ちと家業

露山は明治四年(一八七二)、佐賀城下の町人地に父万吉の二男として生まれた。寺子屋に通い、奉公先で手先の器用さが買われ、長じて指物師となり、元町(現・佐賀市呉服元町)に住した。松原神社前の高級旅館荒木屋の娘ヤスを娶り、八人の子どもに恵まれた。商才もあり、本業の指物師として弟子を擁する傍ら、室内装飾や衣料を扱う南品屋という店も営んでおり、のち大正十年(一九二二)頃には佐賀市白山町土橋に映画館「宇宙館」を開業し繁盛したという。

蓮池町へ

明治四十五年(一九一二)に蓮池町(現・佐賀市柳町)に居を移した。旧古賀銀行の二軒西隣にあたり、もと勧工場であったという。長崎街道に面した住まいは佐賀城下の町人地に特有の、間口が狭く奥行きが長い敷地で、江戸後期の建築になる座敷を中心に南北に中庭を設け、露山自ら部屋を設計したという。父万吉、露山夫妻、息子功夫夫妻のほか、指物師の弟子や女中など大勢が暮らし、四人の孫たちもこの家で生まれ育った。露山六十三歳の時に誕生した操さんは「内孫の初孫」ということで、ひととき可愛がられたという。記憶にある晩年の露山は、好きなときに寝起きし、好きなと



『華の葉』帙

25 「華の葉」
昭和時代(二十世紀) 松本功撮影・編集
縦三四・七cm 横二〇・五cm
紙本印刷 写真
写真の名手であった松本功が、父松旭堂露山の作品を撮影し、編集刊行した解説付写真集。昭和十二年(一九三七年)九月から十四年(一九三九年)六月まで。ここには現存する花道具も見られ(出品資料No.31・34・42)、しつらえや取り合わせなど、実際の使用の在り方を知ることができる。また花材の種類をはじめ、生ける上での心得や注意点も詳細に記され、家元露山の姿勢を見ることができる。



『華の菜』より



34
手提足付籠花入

一口

江戸時代後期～明治時代(十九世紀)
口径一六・五cm 底径二三・〇cm 高さ四八・〇cm
竹製 編籠 漆塗
手付、四脚付の籠。



『華の菜』より



35
銅製鼓形広口薄端

一口

幕末～近代(十九世紀)
口径二五・五cm 底径一五・〇cm
内径三・〇cm 高さ三〇・〇cm
銅製
首部に細管の両耳を付けた広口薄端。口内に銅製筒入。天板裏に「九号 蓮池町 松本」(貼紙墨書)。



40
竹製釣舟形花入 一口

幕末～近代(十九世紀)
口径六・五cm 内径二四・〇cm 全長六〇・五cm
総高(鎖を含む)六〇・〇cm
竹製 漆塗

釣舟形の花入。口の中に内部銅貼の竹筒をお
き花留とする。



『華の朶』より



41
竹製筏形花台 一枚

幕末～近代(十九世紀)
縦三〇・五cm 横六八・〇cm 高さ二・〇cm
竹製

十二本の斑竹をツルでつなぎ、筏形とする。『華の朶』に
掲載(31ページ参照)。



形状としては猪口であるが、煎茶の器として転用されたものか。

江戸時代中期（一七三〇～五〇年代）
肥前・有田製
口径五・八cm 底径三・九cm 高さ四・八cm
磁製

57
色絵松竹梅に
雪輪文猪口 五客



明治時代（十九世紀）
関西製
口径七・三cm 底径二・七cm 高さ三・二cm
磁製
もとは中国の靈芝文をまねたもの。

58
染付靈芝文茗碗 五客



江戸時代後期（一八二〇～六〇年代）
肥前製
口径五・二cm 底径三・五cm 高さ六・五cm
磁製

59
染付四君子文・
山水人物文茗碗 七客



江戸時代後期（一八二〇～六〇年代）
肥前・有田製
口径五・一cm 底径二・九cm 高さ四・五cm
磁製

60
染付貝花文茗碗 五客

家元の本職——蒔絵師・芦刈梅吉



芦刈梅吉(1864～1928) 去風流 18 世家元

用木杯蒔絵師として宮内省・陸海軍・諸官庁の用命を受け、「芦刈梅吉が製造する木杯は精巧で、軍人の寄贈品として多忙を極めた」という(『佐賀新聞近代史年表下』)。さらに大正五年(一九一六)には佐賀市からの依頼を受け大正天皇行幸の際の献上品である太刀掛を制作している(宮内庁三の丸尚蔵館所蔵)。ほかにも優れた蒔絵作品を遺しており、ご子孫のお宅に今なお大切に保管されている(『佐賀城下の蒔絵師 芦刈梅吉』財団法人鍋島報効会、平成二十二年)。

梅吉が生花・去風流を始めた時期は不詳であるが、十六世・春草園池水の相伝人名簿(出品資料No.13)によると明治二十九年(一八九六)に中目録、同三十一年(一八九八)に缺免状を授与されており、遅くとも二十代後半には入門していたものと思われる。十七世・月下園露石の皆伝を受け、蒔絵師としても円熟期を迎えていた明治四十三年(一九一〇)、四十六歳の時に十八世家元を襲名している。梅吉にとって最大の榮譽であった先の大正天皇献上の太刀掛には、花名である「一秀」を銘として記しており、現存作品中でも特に作行きの優れた三組盃などには「一秀」銘が入れられている(出品資料No.84)。去風流家元としての活躍と蒔絵師としての仕事は、梅吉に物理的、精神的な相乗的効果をもたらしていたのであろう。

芦刈梅吉こと松下園一秀は十八年間の長きにわたり家元として活躍し、昭和三(一九二八)年に六十四歳の生涯を閉じた。その後、松旭堂露山が十九世として次期家元を継ぐこととなる。

去風流十八世家元・松下園一秀こと芦刈梅吉(一八六四～一九二八)の本業は、蒔絵師である。芦刈家は祖父の代から佐賀城下材木町で塗師屋を営んでいたことが嘉永七年(一八五四)『電帳(鍋島家文庫)』より知られる。塗師の家に生まれた梅吉がいかにして蒔絵師となったのか、その詳細は不明であるものの、その腕は当時から高く評価されており、明治三十七年(一九〇四)に開所した漆器伝習所の教授をつとめ、さらに御

84 銀沃懸地菊蒔絵三組盃 一組

近代(十九世紀) 芦刈梅吉(十八世家元) 作
(大) 口径一四・五 cm 高さ四・八 cm 底径五・六 cm
(中) 口径一二・七 cm 高さ三・九 cm 底径四・六 cm
(小) 口径一〇・九 cm 高さ三・四 cm 底径四・〇 cm
木製 漆塗 蒔絵 個人蔵

高台内に銘「一秀」(金粉字形)。見込みは銀沃懸地、外面は朱漆塗、高台縁は金釦。大中小とも、見込みを金地の上に銀沃懸地とし、その上に大小の金銀粉を蒔く。下方から上方にかけて、一本の茎をのびし、枝分かれして花と葉をのびす。菊は銀高蒔絵、葉脈や花弁の筋や輪郭を金付描であらわす。



高台銘 一秀



生花 去風流 ―最後の家元・松旭堂露山
出品リスト

No	資料名	員数	時代・年代	法量	備考(作者/所蔵先等)
1	雨中伽	一冊	文化九年(一八二二)自序	竪二五・〇cm 横一六・六cm	堤範房著/鍋〇七〇・二一
2	初代・去風黙翁師称号	一幅	江戸時代後期(十九世紀)	竪八四・六cm 横三五・〇cm	
3	二世・蘭皐舎子来師称号	一幅	江戸時代後期(十九世紀)	竪八四・三cm 横三五・〇cm	
4	三世・花兮庵寒岸像	一幅	江戸時代後期(十九世紀)	竪八四・一cm 横三五・〇cm	十方庵 詠句
5	六世・叶月庵波静像	一幅	江戸時代後期(十九世紀)	竪九九・五cm 横二七・三cm	草場佩川賛
6	九世・魁春含栄芝像	一幅	万延元年(一八六〇)	竪九四・五cm 横三三・七cm	
7	初代・去風黙翁相伝書	一卷	延享元年(一七四四)	竪一七・六cm	
8	二世・蘭皐舎子来相伝書	一卷	明和五年(一七六八)	竪一八・八cm	
9	二世・蘭皐舎子来 花形相伝書	一卷	明和五年(一七六八)	竪一七・六cm	
10	三世・花兮庵寒岸 活花伝記	一卷	享和元年(一八一一)	竪一八・三cm	
11	一時庵五世・和風齋二道伝書	一卷	天保二年(一八一一)	竪二〇・三cm	
12	八世・仙風亭 蘭史相伝銘録	一卷	天保期(一八四〇年代)	竪一五・一cm	
13	活花入門相伝人名簿	一冊	明治二九〇三三年(一八九六)一九〇〇	竪二四・五cm 横一六・〇cm	
14	評価点数表	一冊	明治四十二〇大正二年(一九〇九)一九二二	竪二七・五cm 横一九・〇cm	個人蔵
15	十八世・松下國一秀 免状	一通	大正元年(一九一〇)	竪二二・五cm 横九・〇cm	
16	世代讓什物記録	一冊	明治三十五年(一九〇二)	竪二四・五cm 横一六・〇cm	
17	十六世・春草園池水 松原神社献備の図	一面	明治三十二年(一八九九)	竪二七・〇cm 横三九・八cm	
18	松旭堂露山肖像写真(螺鈿額入)	一面	昭和時代(二十世紀)	竪四六・五cm 横三九・〇cm 厚一・五cm	
19	昆虫図掛硯箱	一合	近代(十九〇二十世紀)	奥行き二四・〇cm 幅一三・五cm 高さ一三・〇cm	松本浅一作/個人蔵
20	十九世・松本露山席札	一枚	昭和時代(二十世紀)	竪二一・三cm 横七・五cm 高さ一・七cm	
21	十九世・松旭堂露山席札	二枚	昭和時代(二十世紀)	竪四〇・六cm 横九・七cm 高さ三・四cm	
22	「家元幕」	一張	昭和時代(二十世紀)	竪四九・〇cm 横一九・〇cm	賀茂百樹筆
23	「去風」扁額	一面	昭和十一年(一九三六)	(本紙)竪二六・五cm 横六一・三cm	鈴木孝種筆
24	「去風」扁額	一面	昭和十三年(一九三八)	竪二四・七cm 横二・五cm	松本功 撮影・編集
25	「華の莖」	一冊	昭和時代(二十世紀)	竪二四・五cm 横一六・五cm	十九世・松旭堂露山書写
26	初目錄・中目錄・花器傳・啓傳・系図・開書附録	六冊	明治三十七年(一九〇四)	竪一八・七cm 全長三一七・〇cm	十九世・松旭堂露山筆
27	十九世・松旭堂露山 傳書卷の巻	一卷	昭和十年(一九三五)	竪一四・五cm 横一七・〇cm	
28	十九世・松旭堂露山 自筆覚書き	五枚	昭和時代(二十世紀)	竪二四・〇cm 横三三・〇cm	
29	十九世・松旭堂露山 投活風流会案内	一枚	昭和七年(一九三二)	竪一九・五cm 横二六・五cm	
30	十九世・松旭堂露山 投活研究会案内	一枚	昭和時代(二十世紀)	竪一七・五cm 底徑六・〇cm 高さ一二・〇cm 鎖一一四・〇cm	
31	古銅蓮葉に雨龍釣器	一口	幕末〇近代(十九世紀)	口徑一五・〇cm 底徑九・八cm 高さ三五・〇cm 胴徑一四・五cm	中国製
32	銅製大花瓶	一口	明治代カ(十五世紀カ)	口徑一六・五cm 底徑二・三〇cm 高さ四八・〇cm	
33	白釉盤口形四耳壺	一口	南朝〇唐時代(五〇九世紀)	口徑一五・〇cm 底徑九・八cm 高さ三五・〇cm 胴徑一四・五cm	
34	手捉足付龍花入	一口	江戸時代後期〇明治時代(十九世紀)	口徑一六・五cm 底徑二・三〇cm 高さ四八・〇cm	
35	銅製鼓形広口薄端	一口	幕末〇近代(十九世紀)	口徑二五・五cm 底徑一五・〇cm 内徑三・〇cm 高さ三〇・〇cm	
36	銅製楕円形水盤 台共	一口	近代(十九〇二十世紀)	竪三〇・〇cm 横四九・〇cm 高さ五・五cm	
37	灰釉流し盤	一口	近代(十九〇二十世紀)	口徑四〇・〇cm 底徑三三・五cm 高さ一〇・五cm	福岡・高取焼カ/個人蔵
38	灰釉盤	一口	江戸時代後期(十八〇十九世紀)	口徑三九・〇cm 底徑二一・〇cm 高さ一〇・五cm	
39	古銅尊形饗養文花器	一口	近代(十九〇二十世紀)	口徑一九・八cm 底徑一〇・三cm 高さ三三・一cm	瀬戸・美濃製
40	竹製釣舟形花入	一口	幕末〇近代(十九世紀)	口徑六・五cm 内徑二四・〇cm 全長六〇・五cm 総高(鎖を含む)六〇・〇cm	個人蔵
41	竹製浅形花台	一枚	幕末〇近代(十九世紀)	竪三・五cm 横六八・〇cm 高さ二・八cm	個人蔵
42	古木花台	一枚	近代(十九〇二十世紀)	奥行き五八・五cm 幅七・五cm 高さ二・八cm	
43	花台	一基	近代(十九〇二十世紀)	奥行き三四・五cm 幅五二・五cm 高さ一五・〇cm	個人蔵
44	黒漆塗花台	一基	幕末〇近代(十九世紀)	竪三八・〇cm 横四九・〇cm 高さ一一・〇cm	
45	紫壇製六角形高脚花台	一基	幕末〇近代(十九世紀)	口徑二四・〇cm 底徑二四・〇cm 高さ七〇・〇cm	
46	花留木型	一点	近代(二十世紀)	口徑一〇・五cm 高さ三・〇cm	

謝辞

本展の開催にあたり、左記の関係機関、関係各位の方々にお世話になりました。記して謝意を表します。

(敬称略・50音順)

松本 操

松本 伶子

佐賀県立博物館・美術館

佐賀県立図書館

芦刈 信城

芦刈 正則

芦刈留美子

石橋 道秀

上田 香苗

宇治 章

大橋 康二

川副麻理子

浄 照 寺

鍋島順仙窟

百武 由樹

福井 尚寿

永松 亨

藤原 友子

森永 雄平

生花 去風流

—最後の家元・松旭堂露山

編集・発行 公益財団法人鍋島報效会

〒八四〇・〇八三二

佐賀市松原二丁目五・一二二

TEL. 〇九五二・一二三・四二〇〇

URL <http://www.nabeshima.or.jp>

発行年月日 平成二十五年五月二十日

印刷 (株)佐賀印刷社

本書の全部または一部を無断にて転載・複製することを禁じます。

©二〇二三 公益財団法人鍋島報效会

茶の



徴古館

The Museum CHOKOKAN
NABESHIMA